

徳島県立農林水産総合技術支援センター外部評価
報 告 書

平成22年度

徳島県立農林水産総合技術支援センター外部評価委員会

昨年8月以降、徳島県立農林水産総合技術支援センター外部評価実施要領に基づき、
徳島県が実施しております試験研究業務、普及指導活動及び教育研修業務につきまして、
延べ4回にわたり外部評価委員会を開催し、各業務の評価を行いました。

評価するにあたり、試験研究—普及指導活動—教育研修業務を一体的に捉え、それ
ぞれ専門的に意見聴取を行うとともに、現地に赴き現地調査を行いました。

今年度調査しました項目の評価内容につきまして、ここに報告書としてとりまとめ
報告致します。

徳島県農林水産部長 殿

平成23年3月

徳島県立農林水産総合技術支援センター外部評価委員会

委員長 諸岡慶昇

目 次

| | | |
|-----|---------------------------|----|
| I | 外部評価委員会の活動経過 | 1 |
| II | 試験研究業務に関する課題別評価 | 2 |
| 1 | 評価対象課題 | |
| 2 | 評価項目及び視点 | |
| 3 | 評価対象活動 | |
| 4 | 評価結果 | |
| III | 普及指導活動に関する課題別評価 | 6 |
| 1 | 評価対象課題 | |
| 2 | 評価項目及び視点 | |
| 3 | 評価対象活動 | |
| 4 | 評価結果 | |
| IV | 教育研修業務に関する課題別評価 | 10 |
| 1 | 評価対象課題 | |
| 2 | 評価項目及び視点 | |
| 3 | 評価対象活動 | |
| 4 | 評価結果 | |
| V | 徳島県立農林水産総合技術支援センター事業 総合評価 | 15 |

I 外部評価委員会の活動経過

徳島県立農林水産総合技術支援センター外部評価実施要領及び平成22年度外部評価実施計画に基づき、評価活動を実施した。活動経過については以下のとおりである。

1 評価内容

(1) 課題別評価

- 1) 試験研究業務
研究課題の設定と成果の普及について
- 2) 普及指導活動
地域の特性に対応した普及課題の設定及び普及活動について
- 3) 教育研修業務
研修教育の内容について

(2) 総合評価

農林水産総合技術支援センターにおけるワンストップサービスのあり方について

2 評価活動

| 時期 | 実施事項 | 場所 |
|-----------------|---|-------------------|
| 平成22年 8月9日 | <p><第1回外部評価委員会></p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 平成22年度外部評価の実施について (2) 平成23年度新規研究候補課題の事前評価について (3) 協同農業普及事業の実施方針(案)について (4) 農業大学の専修学校化について | 徳島市 (県庁特別大会議室) |
| 平成22年 10月8日 | <p><第2回外部評価委員会></p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 吉野川農業支援センターの活動概要 (2) 高度専門技術支援担当の活動概要 (3) プロジェクト課題の取り組みについて (4) 協同農業普及事業実施方針(案)について (5) 現地調査 <ul style="list-style-type: none"> ・促成なすの天敵導入について(阿波市阿波町) ・ユリのボックス栽培について(徳島市国府町) | 吉野川合同庁舎 (大会議室) |
| 平成22年 12月15日 | <p><第3回外部評価委員会></p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 競争的資金制度を活用した研究事業への応募予定課題について (2) 新規プロジェクト研究課題の評価結果について (3) 最近の研究成果について (4) 教育研修業務の評価について (5) 農業大学の現状と今後の方向について | 徳島市 (森林林業研究所) |
| 平成23年 3月8日 | <p><第4回外部評価委員会></p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 平成22年度活動報告 (2) 平成22年度徳島県立農林水産総合技術支援センター外部評価報告書(案)の検討 | 徳島市 (県庁特別大会議室) |

II 試験研究業務に関する課題別評価

1 評価対象課題

試験研究業務の外部評価の課題を「研究課題の設定と成果の普及について」とした。

2 評価項目及び視点

次の2点について課題別評価を行うとともに、試験研究業務全般について各委員独自の視点から総合評価を行った。

(1) 新規研究課題の事前評価

(2) 競争的研究資金事業への応募予定課題に対する助言・指導

各評価項目について、予め設定した評価の視点は次のとおりである。

| 項 目 | | 視 点 |
|----------------------|-------|---|
| 研究課題 の設定等 について | ニーズ把握 | ・ 本県農林水産業者のニーズを踏まえ、効果が十分見込まれる課題が設定されているか。 |
| | 研究内容 | ・ 目標が明確で具体性があるか。目標設定水準は妥当か。 ・ 研究内容が創造性・新規性・先進性に富むものとなっているか。 ・ 研究成果の技術移転や普及展開、波及効果は充分期待できるか。 |
| | 研究体制 | ・ 普及組織や産学官と連携した研究体制がとられているか。 |

3 評価対象活動

平成22年度については、第1回外部評価委員会において、新規プロジェクト研究候補課題に関する研究計画等と、第3回外部評価委員会において、競争的資金制度を活用した研究事業への応募予定課題に関する研究計画等の説明を受けた。

4 評価結果

(1) 新規プロジェクト研究課題の事前評価

各研究所が平成23年度から新たに取り組もうとしているプロジェクト研究事業について、研究計画の妥当性等を評価した。

各研究所が取り組むプロジェクト研究2事業・6課題について、前述の評価視点に基づき5段階で事前評価を行った結果、提案された全ての研究課題について、その必要性を認めた。その内訳は、次表のとおりである。

| 区 分 | プロジェクト事業 |
|-----------------------|----------|
| 課題化の必要性が高い (評価点 4 以上) | 4 課題 |
| 普通 (評価点 3～4) | 2 課題 |
| 課題化すべきでない (評価点 3 未満) | — |
| 合 計 | 6 課題 |

課題化の必要性を認めた研究課題は下表のとおりである。

○プロジェクト研究事業

| 事業名 | 課題名 |
|----------------------------------|--------------------------|
| 美味しさ倍増プレミアム 技術開発事業 (H23～H25) | ・「なると金時」ブランド力向上のための新品種育成 |
| | ・栄養価の高い菌床シイタケ栽培技術の開発 |
| 農林水産イノベーション 加速事業 (H23～H25) | ・ブロッコリーの2花蕾(からい)収穫技術の開発 |
| | ・夏秋イチゴの省力・低コスト株据置作型の開発 |
| | ・ナシ産地を強化する早期成園化技術の開発 |
| | ・「阿波尾鶏」ヒナ低コスト供給技術の開発 |

また、各委員からの意見の総括は、次のとおりである。

①「なると金時」ブランド力向上のための新品種育成

本県のブランド作物「なると金時」の食味をさらに高め、砂地畑に適した新品種を育成することは、緊急性が高い重要課題である。

この研究により、「なると金時」のブランド力が向上すれば、生産者の収入増につながり、産地の振興に寄与すると期待できる。

②栄養価の高い菌床シイタケ栽培技術の開発

現在、廃棄されているワカメの非食用部を、菌床シイタケの栄養剤に有効活用し、栄養価の高いシイタケを栽培する研究は、一石二鳥の効果が期待できる研究である。シイタケの栄養価と旨味の向上、さらに生産量の増加に期待したい。

なお、研究に際しては、ワカメを栄養剤として使用する場合のコスト面についても検討されたい。

③ブロッコリーの2花蕾(からい)収穫技術の開発

側花蕾でも安定的に頂花蕾と同等の品質のものが収穫できれば、農家の経営安定、収入増の実現が期待できる。圃場で収穫が5割増加できれば、手間も掛からないよい栽培方法であり、研究成果に大いに期待したい。

さらに言えば、2花蕾でなく3花蕾の収穫を目指すことはできないか。

④夏秋イチゴの省力・低コスト株据置作型の開発

イチゴの収量が少なくなる時期に、高品質で、収量増加が期待できる夏秋イチゴの栽培技術の研究であり、全ての生産者が望んでいる課題である。研究の成果を期待したい。

また、イチゴは労働集約型作物であるので、株据置作型の開発により管理作業の軽減化が図られるように取り組んでほしい。

一方、栽培の低コスト化を図るために、ソーラー利用の光源とか、沢の水を使つての地表面の冷却など光熱費を抑える方法も検討されたい。

⑤ ナシ産地を強化する早期成園化技術の開発

本県のナシの老齡木の割合が高いことからすれば、改植によるナシ園地の若返りは必須である。

ナシは、実を付けるまでに何年もかかるため、早期に成園化ができる「樹体ジョイント仕立法」は、研究する価値がある。早期成園化と省力化の技術の開発に期待したい。

また、研究にあたっては、ナシの味などの品質についても検討されたい。

⑥ 「阿波尾鶏」ヒナ低コスト供給技術の開発

「阿波尾鶏」は、徳島のブランド品として、非常に重要な品目である。

この研究は、良質ヒナの生産コスト低減により、「阿波尾鶏」生産農場の経営安定化に寄与する研究であり、成果が期待される。

また、産卵後の廃鶏肉の機能性成分の探索により、廃鶏肉の価値が向上すれば、種鶏農場の経営改善にもつながる研究であると評価できる。

(2) 競争的研究資金事業への応募予定課題に対する助言・指導

担当研究員からプレゼンテーションにより研究概要の説明を受け、競争的研究資金事業での採択率を高めるための助言・指導を行った。

競争的研究資金への応募課題については、試験研究に対する予算が厳しい時勢であり、評価会議での意見やコメントが資金獲得につながることを期待したい。

○ 競争的研究資金制度を活用した研究事業応募課題

- ① 廃液ゼロの養液栽培を実現する日射量予測型給液制御システムの開発
- ② 擦れのない綺麗なハモとタチウオを漁獲する底曳網の開発

各委員からの意見の総括は次のとおりである。

- ① 「廃液ゼロの養液栽培を実現する日射量予測型給液制御システムの開発」については、環境負荷軽減のため廃液のゼロは目指すべきである。

成果は植物工場や他産業への応用も考えられるが、如何に精度のよい日射量予測システムを確立するかが鍵であり、センサーを用いるなどして予測が外れた場合のバックアップ体制も必要ではないか。

肥料コスト削減に見合う低コストな設備となるよう期待している。

・「擦れのない綺麗なハモとタチウオを漁獲する底曳網の開発」については、傷は皆無にはならないと思われるので、単価を下げる要因となる傷の分類と、その傷を防ぐ漁具漁法の改良を行うことが効率が良いのではないか。

生体でなく一次加工を行うなどの対応も必要ではないか。
これからの漁業は、資源管理に重点を置くことが必要と思われる。

(3) 試験研究業務の総合評価

現場ニーズに対応した多様な研究課題が提案され、成果を挙げていると評価できる。一方で、課題の設定にあたってはできるかぎり目標を数値化し、成果を具体的なものとするのが重要ではないか。今後は、環境問題など農林水産業の将来を見据えた研究を期待したい。

Ⅲ 普及指導活動に関する課題別評価

1 評価対象課題

普及指導活動外部評価の課題を「地域の特性に対応した普及課題の設定及び普及活動について」とした。

2 評価項目及び視点

次の2点について課題別評価を行うとともに、普及指導活動全般について各委員独自の視点から総合評価を行った。

- (1) 普及課題の設定等について
- (2) 研究成果とその普及について

各評価項目について、予め設定した評価の視点は次のとおりである。

| 項 目 | | 視 点 |
|---------------|-------|--|
| 普及課題の設定等について | ニーズ把握 | <ul style="list-style-type: none">・ 農業者の経営状況を踏まえ、普及が望まれる技術等のニーズを的確に把握しているか。・ 市町村、農協等団体、農業者等地域の関係者の合意は十分得られているか。 |
| | 活動内容 | <ul style="list-style-type: none">・ 目標を明確にして活動しているか。・ 進捗状況は的確に把握されているか。 |
| | 活動体制 | <ul style="list-style-type: none">・ 課題解決のための役割分担、活動スケジュール等について関係者の合意は得られているか。 |
| 研究成果とその普及について | 目標達成度 | <ul style="list-style-type: none">・ 研究成果の普及状況は目標に比してどうか。 |
| | 連携状況 | <ul style="list-style-type: none">・ 課題解決に際し、試験研究機関等との情報共有等が適切に行われているか。 |

3 評価対象活動

平成22年度については、吉野川中流域の農業と普及指導活動について説明を受けるとともに現地調査を実施した。

具体的には、吉野川農業支援センターと高度専門技術支援担当の活動概要の説明のほか、連携によるプロジェクト課題の取り組みとして、「とくしまブランド飛躍戦略の展開」の活動内容について説明を受けた。

また、天敵導入による防除の活動状況を把握するため、阿波市阿波町において「促成なす」の現地調査を、ユリのボックス栽培の活動状況を把握するため、徳島市国府町において「ユリのボックス栽培」の現地調査を実施した。

4 評価結果

(1) 普及課題の設定等について

(ニーズ把握)

- ・普及と研究の連携については、今回の高度専門技術支援担当の説明により、一体的な組織活動体制を描くことができた。ワンストップサービスに関わるニーズ把握がより現場に近くなったことを知り、地域特産のブランド化へ向ける具体的な連携ワークに強い印象を持った。
- ・担い手支援については、考えられる支援活動を行っているのだろうとは理解するが、高齢化し、将来の減少が確実視される農業者人口の歯止めをどのように取るのかは全国的な課題ではあると思う。
- ・広地域の中、たくさんの作物と畜産を中心に活動しているのに驚いた。ブランド産地強化計画策定品目も、多々すばらしいものがあるので、ブランド化に向けて頑張ってもらいたい。
- ・一般課題もたくさん出ているが、どれも必要不可欠なものなので、頑張ってもらいたい。
- ・生産現場の状況は充分把握されており、新しい生産技術等、求めている情報が提供できている。これからの農業に求められている、環境に優しく安全な農産物づくりを重要な課題として取り組むなど、ニーズの把握は充分出来ていると思う。
- ・ニーズをどのように把握しているのかについてももう少し詳しく知りたい。地域特性に合った営農指導であると思われる。生産振興支援については、主力品目の重点支援は大切と思うが、その他に隠れたニーズはないのか。農業者からのアンケートでも採って支援項目を設定したのだろうか。
- ・多くの品目が栽培されている地域において、高度専門技術支援担当と農業支援センターの連携したチームワークが優れていると思う。市町村、関係団体と農業者との連携が密で生産者も安心して計画的に前進できる。
- ・労働力の軽減や収益アップに役立つ技術等について、的確に把握している。また、センターが開発した技術を使って促成なすの天敵導入やユリのボックス栽培を行っている農家を調査したところ、普及員の指導により収益が上がり大変喜んでいたので、ニーズ把握が的確に行われ、ワンストップサービスによって農家への普及が円滑に進んでいることが理解できた。

(活動内容)

- ・普及員に対する他の地域や国の視察や研修が充実すると、活動に新たな弾みがつくように感じる。
- ・目標を明確に活動していると思う。本当によいものづくりは役所の研究機関だけでなく、実務最前線の農家の努力も不可欠であろう。二人三脚で頑張ってもらいたい。
- ・目標は明確で、担当者と農家がともに研究、観察していいものをつくれなかと努力している。
- ・品種の特性に応じた栽培方法の検討がされている。多様な生産品目に対し、少ない人員できめ細かな対応が出来ている。
- ・目標は極めて具体的であり、また、進捗状況は数値で表されており、的確に把握している。

(活動体制)

- ・活動体制もはっきりしている。少ない人数だが地域、県下のために頑張っている。
- ・役割分担も出来ており、課題解決のための活動体制は整っている。問題点を把握し研究のみに終わらず、生産者の立場に立った活動が出来ている。
- ・課題解決のための役割分担は適切で、現場や研究のことをよく把握している高度専門技術支援担当が的確なコーディネートをしている。
- ・徳島県の農業のあり方をグローバルな視点から考え、新たな発想で問題解決ができる人材を育成するために、高度専門技術支援を担当する者等に、海外先進地等への視察研修などを検討いただきたい。

(2) 研究成果とその普及について

(目標達成度)

- ・目標はよく達成されている。ひとつあげると、「促成なすの天敵導入」の現地調査事例について、平成15年以降、タイリクヒメハナカメムシ、ミヤコカブリダニ、コレマンアブラバチを導入し、最近、スワルスキーカブリダニを再導入されている。この間の天敵変遷の経緯と効果の検証はどのようになされているのか。確かに現在はスワルスキーカブリダニが有効視されているが、これからの科学的展望はどのような実証的見地に立っているのだろうか。
- ・概ね予定通り進められていると思うが、成果が顕著な研究は、普及も迅速に進める努力をしていただきたい。
- ・研究成果の説明や現地での視察により、成果がはっきりと出ていると思う。
- ・農作物の出来は、天候や気候に大きく左右されるため、目標を達成するには困難な問題もあると思うが、粘り強く取り組んでいる、現状の設備を有効利用するなど、無理のない方法が取られており、研究成果の普及状況の達成度は高い。
- ・センターが開発した技術を使って促成なすの天敵導入やユリのボックス栽培を行っている農家を視察し、研究成果が実際に農家の収益アップに貢献していることがわかった。

(連携状況)

- ・連携はとてよくなされていると思う。スーパーセル苗やボックス栽培、不織布灌水育苗など、研究で培われた成果が現地の実証(応用)に反映されていて、研究・普及・教育のネットワークが活着している実感を持った。
- ・とくしま安²認証、エコファーマーの育成・支援により、取得403人の実績が物語っていると思う。また、炭疽病対策(簡易検定)防除プログラム作成、配布企画、さらに講習会での周知により、生産者と試験研究機関との情報共有等有意義である。

- ・総合的に、試験研究機関等との連携体制は整っていると思う。
- ・園芸野菜全般に共通した育成・支援体制で、病虫害の防除改善体制で、高度専門技術支援センターと農業支援センターとの連携が密であることを強く感じた。
- ・試験研究機関で開発した技術の普及は、的確に行われている。

(3) 普及指導活動の総合評価

課題解決のための活動体制が整っており、目標を明確に活動している。研究で培われた成果が現地の実証(応用)に反映されていて、研究・普及のネットワークが活かしている実感を持った。

IV 教育研修業務に関する課題別評価

1 評価対象課題

教育研修業務の外部評価の課題を「研修教育の内容について」とした。

2 評価項目及び視点

評価項目については、

(1) 本科の教育について

(2) 農業大学校全般について

の2点とし、予め設定した評価の視点に基づき、評価を行った。

各評価項目及び評価の視点は次のとおりである。

| 項 目 | | 視 点 |
|---------------------|----------------------------------|---|
| 本科の教育 について | 専攻コース の編成・運 営 | ・コースの編成や運営は、本県の農業の実情や時代に合ったものとなっているか。 〔模擬会社の設立により、ビジネス感覚等の新たな感性 や能力が醸成されているか〕 |
| | 教 育 内 容 | ・育成目標とする人材像や求める学生像が明確になっているか。 ・卒業後の進路指導は、学生の意向や能力にあったものとなっているか。 |
| 農業大学校 全般につい て | 試験研究機 関及び普及 指導機関な どとの連携 | ・学生の指導にあたり、関係機関などとの連携は適切であるか。 |

3 評価対象活動

平成22年度については、第3回外部評価委員会において、農業大学校の現状と今後の方向について説明を受けた。

4 評価結果

(1) 本科の教育について

(専攻コースの編成・運営)

- ・模擬会社設立は実践的な教育として期待する。
市場調査による商品開発など消費者のニーズにあわせた生産物の決定、また、異業種交流による新しい発想で新商品を生み出すなど、多角的な活動を望む。
- ・意欲ある学生指導になっている。
高度で先進的生産技術習得、新品種導入等、学生が希望を持てる進路であり、将来地域農業社会での中核的役割を担う人材育成に期待する。
- ・専攻コース制になり、指導内容も充実し、生産技術の内容、農業や地域資源への取組、アグリビジネス他3コースともしっかりした内容で学習できるようになっていると感心した。
- ・1年次からマンツーマン指導で学生の個性に合わせた基礎的な学習・研修から実習へ向けて指導をし、生産技術コース、地域資源コース、農業経営改善・アグリビジネスコース等3つのコースを主体にした自主的な学習が習得できて、将来、自分に合ったコースを専攻でき、意欲ある学生づくりに適していると思う。
- ・入学者数が増加していることは、大変喜ばしい。現在の専攻コースの編成は入学希望者のニーズに沿っている証明ではないだろうか。工業・商業高校から進学してくるということは、魅力ある農業大学だと自信をもって欲しい。
- ・1年次から専攻コースを分けることで、学生が目的意識を高く持てるようになったのではないかと。専攻コース名から教育目標も読み取れるので、大変良いと思う。
- ・全国初の模擬会社が設立され、ここに至る関係者の努力に敬意を表す。
発足したばかりで今後の活動を待たなければならないが、運営手法・決算内容等はどうか、その内容を早く知りたい。
- ・技術を習得し人材育成をするという方針の中で、作るだけでは生き残れない時代に備え、ビジネスの勉強ができるということや、模擬会社3部門に分かれて企画立案されていることなど、大切な事だと期待している。

(教育内容)

- ・起業者をめざす高い意欲と知識習得及び自営農業の経営改善，アグリビジネスを起こす人材育成等選択の幅があり，楽しく教育を身につけ，社会のために頑張ってくれるものと期待している。
- ・学生自ら関心のある問題に取り組み，先生と学生がマンツーマンで密接に取り組み，研究，聞き取り他総合的な指導体制のもと幅広い学習が出来ていると思う。
- ・学生自ら課題や関心のある事柄を考えて調査したり，研究発表をして自主性や意欲，実行力，表現力を習得し，将来の農業経営に能力を身につけることを目的とする教育方針で地域農業や農村生活のリーダー作りに期待をしている。
- ・景気低迷による建設不況で建設業が農林業への転換もあり，そういった方々への技術指導の機会も多くなってくるのではと思う。
- ・実践学習・マンツーマン指導等により個別に対応が出来ており，将来の担い手育成や実社会での仕事においても大変役立つ内容が盛り込まれていると思う。
- ・社会に出て役立つ内容が満載の教育内容で，卒業生が広い視野で農業と取り組めるように考えられたカリキュラムとなっている。
- ・プロジェクト学習に期待している。しかし，指導する先生の負担が大きいのではないかと心配する。軽く楽しいテーマで，学生が遊び心を持って進められる内容でも良いのではないと思う。このような学習はコミュニケーション能力や情報リテラシーの向上をめざすものだから，学習内容は多少冒険をさせて，異分野に踏み込んでみた方が将来の糧になるかもしれない。
- ・各専攻コース選択者の卒業後の進路はどのようになっているか。進路指導の方針に沿った結果となっているのだろうか。
- ・農業高校だけでなく，工，商の勉強をした上で農業を学ぶというのも将来，広範囲の可能性を生み出すことと評価する。

(2) 農業大学校全般について

(試験研究機関及び普及指導機関などとの連携)

- ・全ての機関が情報の共有，技術連携が不可欠であり，確かなネットワーク構築は必要。

- ・様々な実習がカリキュラムに組み込まれている。県の研究機関で開発した栽培技術が、実際の教科や学習に応用され、このような実践教育に結びついている、というスタンスの報告があれば連携が委員にもよく見えるように思う。一連の報告では、試験研究や普及との結びつきが、なかなか表だって見えなかったような気がする。次回は、もしよければ、普及指導員と学生の技術問答のような経験談を聞かせて欲しい。
- ・修了生就農後のフォローアップを図る連携と強化、同時に専門講師派遣等による相談会実施、また各々学生に適した先進農業体験学習、専門研修、農業指導及び支援実施等により希望を持てる若者たちが農業に人生をかけ、夢を持ち、喜びを感じる人材育成となっている。
- ・「徳島農大そらそうじゃ」の設立に学生の意見を中心に進めてきたことは非常に新しい方針で、これからの農大生と農業支援センターと高度専門技術支援センターとの連携もさらに密になると思う。
- ・就農後の農業指導も試験研究機関や支援センター等とのつながりが密になり、賛成する。
- ・試験研究機関から講師を呼ぶなど連携はとれていると思う。直接的に関係はないと思うが、幅広い学習という意味で水産関係の講師の派遣も考えてはどうか。
- ・講義、研修、演習や体験学習を通じて、よく連携が図られている。
- ・技術支援部との連携の中で、「就農後の支援体制の確立」とあるが、卒業生やアグリテクノスクールの修了生を対象としての支援体制と思われるが、その実績等についても知りたい。
- ・大学教授を招いての講義とか農研等、研究員による技術演習を9回も実施し、また支援センター長の講義等もなされており、連携は良好と評価する。

(3) その他

- ・今までの農大のイメージと違う新しい農大へと変わりつつあることに期待する。模擬会社の設立に苦労したと思うが、関係者の努力の賜物と感心している。これからも頑張ってもらいたい。
- ・かねがね、一度でいいから、授業の現場、とくにプロジェクト学習の成果発表のような場を見せていただければと希望している。

- ・農大の会社組織は全国初めての取り組みで「徳島農大そらそうじゃ」は画期的である。今後「徳島農大そらそうじゃ」で頑張っ、多くの学生を送り出して、徳島を農業県にしてほしい。
- ・養護学校の生徒との交流なども取り入れたら、双方に得るものがあるのではないか。結局は人の教育なので、精神的にも落ち着きのある思いやりのある人が育てば、企業からの求人も増加するのではないだろうか。農業大学校の良さを外部に知らせていくことも必要だと思う。
- ・農業大学校では先生方が自ら会社設立や合意形成方法等について学ばれるなど、新しい教育にチャレンジするために、大変な努力をし、頑張っておられることに感動した。専修学校化や奨学生を申し込めるなど、学校としての体裁もしっかり整ってきて、ますます期待が高まる。
- ・オリジナル商品の企画や販売については、実業高校等でも盛んに行われているので、農大や「そらそうじゃ」をPRするためにも、それらを一同に集め、「とくしま青春あおぞら市」のようなものを保護者団体らと協力し企画できないかと思う。
- ・23年4月の専修学校への移行にあたって、専修学校化のメリットが列挙されている。今後の運用の中で活用され、さらに魅力ある大学となるよう望む。
- ・若者たちが農業に人生をかけ、夢を持ち、喜びを感じる人材育成となっている。いつか地域社会のため指導者となってくれることが楽しみ。

(4) 教育研修業務の総合評価

意欲ある学生指導になっている。将来、地域農業社会での中核的役割を担う人材育成に期待する。専攻コースになり、しっかりした内容で、社会に出て役立つ内容が満載である。

また、専修学校への移行にあたり、奨学金の借入が可能となるなど、学校としての体裁もしっかり整ってきて、ますます期待が高まる。

V 徳島県立農林水産総合技術支援センター事業 総合評価

徳島県から委嘱を受け、農林水産総合技術支援センターが進める試験研究業務、普及指導活動、教育研修業務について、同センター外部評価実施要領に基づき評価を行なった。本年度は、農林水産総合技術支援センターの機能が、効率的・効果的に発揮されているかを一元的に評価するために、総合評価のテーマを「農林水産総合技術支援センターにおけるワンストップサービスのあり方について」とし、各業務の連携状況について現地調査及び評価を行なったので、以下、その結果について報告する。

総合評価テーマ

「農林水産総合技術支援センターにおけるワンストップサービスのあり方について」

平成 20 年に策定された「徳島県食料・農林水産・農山漁村基本条例」、さらには「徳島県科学技術振興計画」に沿い、県民に対する高度で迅速なワンストップサービスを図る取り組みの一環として、農林水産総合技術支援センターは、研究―普及―教育を有機的に結びつける制度改革を進めている。過去 2 年度の討議経緯を踏まえ、今年度は現況視察と意見交換を行なった。細部は課題別評価に譲るが、大要は以下のとおりである。

1. まず試験研究分野であるが、厳格な内部評価を経て提示された課題はいずれも時期を得たテーマであり、徳島の特色やブランド名をさらに高める意気込みや、コストダウンや環境に優しい実用技術の開発など意欲に満ちた研究事業が企画されている。また、開発される技術が担い手に可能なかぎり早く応用されるよう、技術の内容や適用可能性の検討も的確になされている。今後は、「ワンストップサービス」と個々の研究課題がどう結びついているかを成果情報誌等に明記され、ステークホルダー（受益者一般）にその進行状態が直に伝わるような工夫を検討されてはどうだろうか。ワンストップサービスに対し「実証済み」「実証中」「対応中」等の区分で示すのも一法と思われる。普及の現場を訪ねると、例えばスーパーセル苗やボックスユリに、ワンストップサービスが反映されている。開発された技術の経済性などにもっと踏み込んだ比較考察が加えられれば、現場に生きるサービスをより適切に伝えることができるように思われる。

なお、競争的研究資金事業への取り組みも地域の社会的ニーズに沿った内容であるが、今後、創造性や先進性に加え、全国の研究動向の把握や他機関との連携を強化し、採択率を高める余地が残されているようである。

2. 普及分野では吉野川農業支援センターで活動概要の説明を受け、促成なす栽培への天敵導入（阿波町）とユリのボックス栽培（国府町）を視察した。支援センターでは、高度専門技術支援担当の活動現況を知り、限られた陣容にも関わらず極めて広範な普及の要請課題に対応されている実情を目の当たりにした。試験研究サイドで開発された技術は、促成なすやユリ栽培を見ても確かに活かされている。ワンストップサービスが直に現場と結びついた典型であるが、広くはまだ知られていない印象を持つ。技術普及のマニュアルなどもよく準備されているが、今後広報活動にどう乗せるかという課題があるように思う。なお、意見交換の席上で委員から出された、国外を含めた研修の機会を普及に携わる方々にも広げるような制度の検討は、農産物の国際競争が熾烈化する現況に鑑み、創意工夫の芽を育むという観点からも重要となろう。

3. 教育研修分野では、1年次前期から専攻コースに所属し、実習と主体的に取り組む制度や、「私たちは経営者を目指したい」というキャッチフレーズに、次世代を担う若者にこれからの農業のあるべき姿を教示される視座がよく織り込まれている印象を持った。経営者のセンスをどう若いうちから育むか、それをきちんと意識された教育方針がカリキュラムに組み込まれている。また、「徳島農大そらそうじゃ」の取り組みは、全国でもまだ珍しい企画とみられ、社長の選出や株主との関わり、株券の意味、総会の運営を含め、模擬会社を事例に幅広の運営を体現させる取り組みが印象に強く焼付けられた。長い目で見た今後の進展に期待している。

4. 徳島県立農林水産総合技術支援センターの整備運営の着手が、今年度の県議会で承認された。平成25年春のオープンをめざしPFI方式による施設整備が始まるが、現在検討を続けている試験研究・普及指導・教育研修を一体化したワンストップサービスが、この県民に開かれた施設の完成でその機能と役割を実践に結びつけ、県下の農林水産業の振興に大きく寄与できると期待される。向こう2年の間に、当センターのミッションをさらに充実されるよう外部評価委員会も助力を続けたい。